

〈研究ノート〉

## Shakespeare 劇の演出について(3): From R to T (From *Richard III* to *The Two Gentlemen of Verona*)

鈴木 邦彦

前回<sup>1</sup>に続き、1996年の春から夏にかけてイギリスで観たShakespeareの舞台の演出について記していきたい。前回はタイトルがKからMの作品を取り上げたが、今回はR以降の作品を取り上げる。

R

*Richard III* (『リチャード三世』)

1996年7月22日夜所見。RSC. Barbican Theatre (London).

市民に向かってGloucester公を王にとアピールする3幕7場の舞台装置の使い方  
の面白さや、同時期に同所地下の小劇場Pitで上演されていたBen Jonson作  
*The Devil Is an Ass*との配役の妙などを中心に、拙論(「シェイクスピア、演出、  
そして劇場」113-117)で一部論じたので割愛。

*Romeo and Juliet* (『ロミオとジュリエット』)

1996年4月18日夜所見。RSC. Barbican Theatre (London).

---

<sup>1</sup> 「Shakespeare 劇の演出について(2): From K to M (From *King Lear* to *A Midsummer Night's Dream*)」のこと。

場内はまだ明るいうちから舞台に役者たちが登場し始め、両家相争う様子でストップモーション。Chorusがその真中でprologueを語る。張り出し部分と奥とを隔てるカーテンが開くと、土埃が立ちそうな、正にイタリアの路上のカフェといった雰囲気。高いところには洗濯物など干してあるのが見える。もっとも、登場人物のうち両家の家長やParisは山高帽を被っていて、正にイギリス的だ。

そのカーテンが閉じると、張り出し部分の奈落からベッドがせり上がってきて、第3場となる。Romeo役のZubin Varlaは、彫りの深い顔立ちをしている。メイクがそうなのか、脂ぎった印象だ。Varlaという苗字が何系かは知らないが、Zubinというfirst nameも珍しい。インド出身の指揮者Zubin Mehtaと同じZubinだろうか。Juliet役Lucy Whybrowは逆にあっさりした顔立ちだが、可憐なJulietに仕上がっている。殊に舞踏会の場面では、その他大勢の娘たちが適度に下卑て描かれているので、尚のことその感が強い。Mercutioに扮するのは、この前観た*The Taming of the Shrew* (次項)で召使Tranioを演じていたMark Lockyerで、擦りを入れながらしょっちゅう観客を笑わせる。自分の主人に化けたTranioの場合はアメリカのいかれたrockerか何かの出で立ちで少し浮いた感じもしたが、とにかくこの役者はこういう芸が得意なのだろう。

舞台奥の両側にあった建物のうちの一つが中央に移動して、その二階部分の縦長の窓が開くと、balcony scene.

4幕5場、Julietが飲み干した後の薬瓶はどうするのかなど思っていたところ、乳母が見つけて素早く枕の下に隠した。事情を知る彼女なれば、すぐに自殺と判じたという解釈だろう。

変に抽象化しすぎない舞台装置、妙に奇抜な解釈を持ち込んだりしないオーソドックスな演出で、総じて、血の通った人物像、良い舞台を観たという感じだ。

T

*The Taming of the Shrew* (『じゃじゃ馬馴らし』) 1

1996年4月5日夜所見。RSC. Barbican Theatre (London).

Half Price Ticket Boothで当日半額券を買ったのだが、Stalls (1階席)のS26. 後ろから2列目ながら、左右で言うところちょうど真中のとても見やすい座席だ。

Proscenium archも床面も真赤で、血を思わせる。舞台奥は暗雲が渦巻き、稲光。まるで*The Tempest*の幕開きのようだ。酔ったSly (Petruccioも演じるMichael Siberry)が、Katherinaも演じるJosie Lawrence (戯曲にあるhostessではなく妻ということらしい)と喧嘩する。彼女が立ち去った後、貴族たちが現れてSlyを着替えさせるのがスモークの中。渦巻く暗雲のバックはずっと変わらず、終始おどろおどろしい感じだ。

せり出しで赤いカーテンが現れると、そこから(本編の)役者たちが登場。Bianca (Tilly Blackwood)は大人しい物腰の中にもsaucyな雰囲気をもよく醸している。Petruccioは野蛮一方というのではなく、Katherinaのじゃじゃ馬ぶりに時に怯んだり、Katherinaの最後のスピーチには意表を突かれたが如く戦いたりする。

最後、背景のセットから貴族たちが厳めしい様子で再度現れる。荒々しくPetruccio = Slyの身ぐるみを剥ぐや、再びせり出しで上がってきた赤いカーテンの中に消えて行く。それを追うように手を伸ばすSly。奥に妻が現れて、疲れ切ったSlyの頭を労るように抱きかかえて幕。

プログラムによると、役者たちの演じる芝居(劇中劇)はもとより、inductionのうち貴族たちがSlyを着替えさせていっぱい食わせようとする部分からして、Slyの夢の中の出来事ということにしてあるらしい。また、Petruccio = Slyは、最後に、自分が妻にしようとしていたこと(= taming)は愛ではないと悟るのだと。

「プログラムによると」などとわざわざ書いたのは、舞台を観ていただけでは、そのような解釈や演出意図は必ずしも明瞭でないように思われたからだ。正直に言う、そもそもSly / Petruccioと妻 / Katherinaが一人二役で演じられているということさえ、Barbican Theatreのような大きな劇場だと、よほど舞台に近い座席か、個々の俳優をよほどよく知っているかでない、判然としないだろう。

それはさて置き、男女同権が叫ばれる昨今では、もうこの劇は何かしら捻った

解釈をしないと上演できないらしい。全体に枠組みを作る、つまり inductionばかりでなく最後にもまた Sly を登場させるという発想自体は、*The Shrew*ではなく *A Shrew*<sup>2</sup>にあるものだ。全体が夢という趣向も、*A Shrew*の Sly が誤ってそうした認識を示すところからヒントを得たのだろうが、捻り方として少し安易ではある。

### *The Taming of the Shrew* (『じゃじゃ馬馴らし』) 2

1996年8月5日夜所見。劇団 A and BC. Lincoln's Inn (London).

Lincoln's Inn とは London に四つある Inns of Court (法曹院とか法学院とか訳される) の一つである。Barrister (法廷弁護士) の養成や認定をする機関であり、England と Wales の barristers 及びその中から選任される裁判官も検察官も全て四つの Inns of Court のうちのいずれかに所属している。中でも Lincoln's Inn は最古の歴史を誇り、その起源は少なくとも 1422 年以前にまで遡ることができるという。<sup>3</sup>

無論、こんな場所で普段から芝居が上演されているわけではない。また、普段なら私のような一般人しかも外国人が勝手に出入りできるような場所でさえないだろう。が、どういうコネクションがあったのかは知らないが、fringe の劇団が Lincoln's Inn の煉瓦塀で囲まれた中庭で芝居の上演をするというのである。

Lincoln's Inn の小さな門の前に人が立っており、芝居を観にきた旨を断って中に入れてもらうと、広い芝生の奥(北端)に照明器具を仕込んだ鉄塔が二本建ち、

---

<sup>2</sup> 1594年に出版された作者不詳の喜劇 *The Taming of a Shrew* のこと。シェイクスピア作の *The Taming of the Shrew* と異なり、induction の Sly が本編もしくは劇中劇の進行中に「観客」としてしばしばコメントを加える他、最後に、眠り込んだまま元の場所に置き去りにされるという場面が付く。前者が後者の記憶に基づく海賊版であるとか初期原稿であるとか材源であるとか改作であるとか、二つの作品の関係性については諸説あって定まっていない(高橋他編、『研究社シェイクスピア辞典』、「ジャジャ馬ナラシ」の項目を参照)。

<sup>3</sup> “The History of the Inn.” The Honorable Society of Lincoln's Inn. 2020年11月6日閲覧。  
<<https://www.lincolnsinn.org.uk/about-us/the-history-of-the-inn/>>

パイプ椅子が四十脚余り、二列に並べられていた。が、その椅子に座っている人は一人もなく、皆、周囲の芝生の上にシートを敷き、寝転がったりワインを飲んだりと如何にも fringe の芝居らしい。私もやむなく芝生に腰を降ろして待つこと暫し、チケットの束を手に小さな手提げ金庫を持った青年が現れたので、彼からチケットを買い(10ポンド)、適当な椅子を選んで腰掛けた。

19:30に開演。左右奥の茂みから、男性七人女性二人が整列して走って登場。客席の間に登場した別の男性一人の指揮に従って、ハーモニーを利かせた歌を一曲披露する。女性二人は明るいアイボリーのドレスに帽子。男性は皆、青いシャツにニッカーボッカーズを基調にしているので、上着その他は各々ばらばらなのに全体として纏まりが取れている感じがある。この十人で全ての役を演じていくのだ。

Slyによる induction はなく、いきなり Padua の街。老年一人・壮年一人を含む役者たちは皆、個性的だ。中でも際立ったのが Tranio 役の男優(プログラムも何もないので名前は未詳)。Cockney ではないのだが、それっぽい、籠もったような柔らかく暖か味のある発声で、演技もどことなくユーモラスで存在感がある。4月5日に Barbican で見た Mark Lockyer の Tranio (前項) のような派手さはないが、その分悪乗りもなく、好感が持てる。

もう一人際立ったのは Petruccio 役の男優だ。昔の戦闘機乗りのような、耳覆いの付いた皮の帽子にゴーグル、皮のコートに白い襟巻きという出で立ちで、車椅子の後ろに自転車が付いたようなものに乗って登場。自分が前の椅子に踏ん返り返って座り、後ろの自転車を、無精髭を生やした小柄な Grumio に漕がせている。顎が尖った、目付きの鋭い男で、Petruccio らしく如何にも一筋縄では行きそうにない感じ。登場して間もなく、ふと視界から消えたかと思ったら、後ろから不意に私の隣の椅子によじ昇ってきて、私や反対側の老婦人の肩を抱いたり、椅子の上に立ち上がったりがしながら、一幕が終わるまで、そこで台詞を言う(たぶん、たまたま前列の椅子が一つ空いていたので、即興的にそうしたのかもしれない)。

Katharina と Bianca の姉妹役は、部分々々を見れば一つとして似た所はないの

だけれど、どことなく雰囲気が似ている。巧い配役と思う。

4幕1場では、Petruchio以外の男優は皆Petruchioの召使役。青シャツで統一していた理由がここに来てわかった。Tailorとhaberdasherは一人が兼ねる。PedantをVincentioに仕立てるエピソードは全てカット。Widowは(女優が足りないからだろうか) Biondello役の男優が演じる。

前項のRSCのような捻った解釈などなく、如何にもストレートな上演だが、これはどうせ昔のお芝居なのだから男尊女卑だの何だのと目鯨立てることはないということだろうか。Inductionを省きながらも、これはお芝居と開き直るのを可能にしたのは、(proscenium archの向こうに見えるのは現実に起こっている出来事だと考えようとしたリアリズム劇の逆で) そもそも演技空間と客席空間とを截然と隔てるものがない仮設会場においてPetruchio役の俳優らが両空間の間を自由に行き来しつつ演技するという今回の公演のあり方そのものであったかもしれない。賛否両論あるとは思うが、拙い捻りを加えるよりよほどすっきりしているという印象を受けたのも事実だ。それぞれの役者の持ち味とも相俟って、芝居の面白味は十分堪能できたと言ってよい。

### *The Tempest* (『あらし』) 1

1996年6月11日夜所見. New Shakespeare Company. Open Air Theatre (London, Regent's Park).

この研究ノート(1)でも触れた、Regent's Park内に作られた野外劇場である。舞台の上には、本棚や暖炉もろとも傾いた白茶けた部屋。崩れ掛けた、もしくは難破して沈み掛けた船というイメージだ(Designer: Simon Higlett)。客席を見渡してみると、高校生くらいの若い観客がかなりたくさん入っている。上演中にノートを出して何やら書き付けている者もいたから、学校の課題か何かで見に来ているのだろう。

開演と同時に、観客席の間の通路等を船乗りらが叫びながら走り回る。Prospero (Denis Quilley)の衣装は礼服のそのような黒のチョッキとズボン(最終場ではその上に黒いガウンを羽織ってMilan公爵の姿になる)。Magic garment

は臙脂色の地に白の唐草。唐草模様というと風呂敷ぐらいいか思い浮かべられない私の発想が貧困なのかもしれないが、何かおかしな印象。

一方、Miranda (Debra Beaumont) は薄汚れた白い男物の服を着ていて、父親の染み一つない服装とアンバランス。が、4幕でドレス姿となって現れる。この対比は面白い。

Arielは、頭にお饅頭を結ったEllen O'Grady。女性のArielというのはたぶん初めて見たと思う。裾を引き摺るほど長い紫色の衣装を着ている。精霊らは、ゆったりした白いシャツにぴったりした黒いズボンの若い男女。Caliban (David Cardy) は、ぼろぼろの黒い法服のような衣装を着て、ぴったりした緑なし帽のようなものを頭に被り、煤で汚れたかの如く顔を黒く塗っている。Stephano (Christopher Biggins) とTrinculo (John Griffiths) は、4幕後半、それまで着ていた上衣を脱いでラクダのシャツに腿引きといった姿で現れて笑いを取った。この場の滑稽味を増すのに効果的と言うべきだろう。

最終場は、戯曲上Sebastian (Peter Forbes) やAntonio (John Berlyne) の謝罪の台詞がないので、どう解釈するか、どう演出するか、大きな幅が生じるところだが、この演出 (Patrick Garland) では、Arielに命じて皆を呪縛状態で舞台に導いた後、Prosperoが彼らの旧悪を言い募る台詞の最中、SebastianもAntonioも停立した状態からがくっと膝を折って観念した態。Prosperoが公爵領を返せと言う箇所では、無言ながらAntonioは自ら胸の勲章のようなものを外し、Prosperoの胸に付けた(もちろん戯曲にはこんなト書きは無い)。こんなにわかりやすくしてしまっているのかとも思うが、あり得べき演出の一つの形には違いない。

## *The Tempest* (『あらし』) 2

1996年6月27日夜所見。SOHO Group, North Westminster Community School (London, Westbourne Green).

Paddington Stationの北西、West Way (A40) と運河に挟まれた辺りのHarrow Road沿いにNorth Westminster Community Schoolという学校があった。過去形で書いたのは、最新の地図で見ると今やWestminster Academyに名前が替わっ

ているからである。現在どうなっているのかはわからないが、以前は学校の敷地内に若者に様々なパフォーマンス・アーツを紹介することを目的に建てられたstudioがあり、単に同校生徒による公演に使うというのではなく、プロの劇団がしばしば訪れ、我々のような一般観客にも開放されていた。

開演予定時刻の19:30を回ってもしばらくの間待たされ、ようやく観客席への入場を許された。今夜の観客は二十人足らずか。下手奥にProspero (Bernard Tagliavini)の居室と思しき一角。本が積まれた机に椅子。その前に小さなテレビ。上手奥には白い布で覆われた小さなテント状のもの。後にMiranda (Hannah Clayton)がこのテントに閉じ籠ったりする。上手の中ほどに大きなテレビ。画面はザーッと砂嵐状態である。舞台手前やや上手寄りに大きな籐製の箱。やがてここからCaliban (James Derek)が登場する。

Mirandaは男の子のような短い髪をし、白いチュールのような素材でできたスカートを着ているものの、その上にはあちこち破れたカーキ色の戦闘服のようなチョッキを着、足にはレッグウォーマーに黒い編上げ靴。隠れて煙草も吸えば、Calibanの入った箱はおろか、気を失って倒れているFerdinand (Paul Huntley-Thomas)さえも蹴ったりする。こんな野性児っぽいMirandaは初めて見た。孤島で自然に交わって暮らしていればきっとこうなるだろうとは思うけれど。

Ariel (Emma Cross)は白塗りでオールバック。黒いストッキングに黒いホットパンツ、黒いレオタード様のぴったりした服。前腕には金属製の腕輪のようなものが巻かれており、首には黒地に金具の光る首輪。大団円でProsperoから解放された時、この首輪を取ると赤黒く腫れた跡になっているのが見えた。空気の精もまた主人に奴隷の如く酷使されてきたことがわかるという仕掛けだ。手にはfinger cymbalsのようなものを持ち、これをチーンと鳴らすと照明がピンク色に変わって、Prosperoの前に出現した態。再びチーンと鳴らすと照明が白色光に戻り、もうProsperoにさえ見えぬ態。

Calibanは禿げた、もしくは剃った頭に黒線で何やら模様が描かれており(刺青なのかメイクなのか判然としないが)、耳と鼻とに開けた穴を鎖で繋いでいるという異様な風体だ。



登場人物はこれだけで、TrinculoやStephanoのエピソードは無し。AlonsoだのSebastianだのAntonioだのは舞台上に登場しないが、どうやらProsperoは椅子の前に置いた小さなテレビを通じて彼らを監視したり彼らに魔術を掛けたりしているらしい。上手に置かれた大きなテレビには、本当は、時に応じて彼らの模様が映し出されるはずだったのではないか。ビデオかテレビかの故障のせいで、砂嵐が固まってゆらゆらしたようなものが一瞬映っただけだったけれども。

Prosperoの休息中に、Calibanが独白のようにして彼に毒づく。ナイフを口に強く押し当てて(まさか本物ではないと思うが)口から血を滴らせながら毒づく場面は、上にも書いた頭の刺青状の模様や耳と鼻を繋ぐ鎖とも相俟って、凄絶な印象を与えずにはおかない。

MirandaとFerdinandは、求愛の対話の場面で時々かなり間を空けるので、相手の台詞に対する相互の驚き・戸惑い・喜びがリアルに出せた。最後、Mirandaは肩を露に出したオレンジ色のドレスに着替えて登場する。スカートの下がレッグウォーマーに編上げ靴のままだったのが、単なる舞台進行上の便宜のためか演出上の意図に沿ったものなのかは俄かにはわからないが。

Prosperoがepilogueを語り、溶暗の後、フラットな照明になってcurtain call。拍手。再び溶暗……と、急に簾の箱の蓋が開き、Calibanが大声で怒鳴りながら飛び出してきた。おっと、Calibanを忘れていた。何を言っているのか、残念ながら聞き取れなかったけれど、これには驚かされた。再び、今度は全員で(本当の)curtain call。

何人かの登場人物もいくつかのエピソードも省略してのコンパクトな上演だったが、私が想像するようにテレビ画面に鳥の他の部分での様子を映すはずだったのなら、生の演技とビデオ録画のハイブリッドによって、舞台に実際に登場する人間の数は少なく抑えながらも原作のエピソードはあまり削らずにカバーするという、コストパフォーマンスの高い上演になるはずだったのではないか。こういう場合コストパフォーマンスという用語が相応しいか否かはさて置き、劇団員の少ない小劇団にとって(万能薬でないのは明らかだが)演出方法の一つの選択肢にはなり得るかもしれない。

*Troilus and Cressida* (『トロイラスとクレシダ』)

1996年8月8日昼所見. RSC. Royal Shakespeare Theatre (Stratford-upon-Avon).

Proscenium archの手前の上手側に、盾のつもりだろう、バイオリンの胴体にも似た大きな物体と、槍のつもりらしい大きな棒が二本. 13:00, 赤い幕が上がると、下手から奥中央にかけて、赤錆びた鉄板を打ち付けたように見える壁. この壁は、下手の proscenium archを軸にして角度が変わる他、一部が開いて登退場口になったり、真中の一部が押し出されてきて建物の様相を見せたりする(1幕2場でトロイの兵士たちの品定めをするのは、ここの二階から). 壁の手前は本来の舞台面より二・三段高くなったプラットフォーム. その後ろ、奥から上手へと湾曲した壁. この壁の腰の高さくらいの所に色の変った部分があり、最初ただの模様かと思っていたら、舞台の照明が暗くなると(たぶん壁の後ろの照明が透けるのだろう)夕焼け空に浮かぶ山の稜線のような趣. この壁の中央に大きな扉. 舞台手前の床には、登退場用に階段の付いた穴が開いている (designed by John Gunter).

Prologueの役は Thersites (以前ここ Stratfordの Swan Theatreで観た *The White Devil* で Flamineoを演じた Richard McCabe) が務める. Troilus役、高貴さと野性味を合わせ持つ、細面の Joseph Fiennes. Pandarus役を Clive Francis が熱演. Cressida役 Victoria Hamiltonは黒い巻毛で浅黒い肌をしている. Ulyssesは *The White Devil*で Monticelsoを演じた Philip Vossだが、声がいい. Achilles役 Philip Quastは、ギリシア方の英雄と言うからにはもう少し贅肉を落とした方がよさそうだ.<sup>4</sup> Ajax (筋骨隆々の Ross O'Hennessy)はおつむの方がもう一つという感じだが、この役の役作りとしてはたぶんそれでいいのだろう. Hector役 Louis Hilyerは、トロイ方の英雄と言いながら、印象がもう一つ.

---

<sup>4</sup> と当時は思ったものだったが、*Les Misérables*の Javert役で活躍し、前年の1995年には West Endで幕を開けてから10周年目を記念する *Les Misérables: The Dream Cast in Concert*でも同役を務めた人だと、恥ずかしながら後から気が付いた.

今回の演出 (Ian Judge) では裸体オンパレードの感が強く、HectorとAjaxが一騎討ちする場面では双方とも禪一丁だし、もっと早い場面でも、兵士らが戦場から引き上げてきては素裸になっていたし、Paris (*The White Devil*でBrachianoを演じたアフリカ系俳優Ray Fearon) とHelen (絶世の美女と言いながら髪がほさほさのKatia Caballero) も、風呂上がりか何かのように素裸で登場しておいてタオルを体に巻いたりする。

4幕5場で、ギリシア方に連れてこられたCressidaを見て、Ulyssesが“*There’s language in her eye...*”<sup>5</sup>と評する箇所、Cressidaが退場してから言うものと思ったら、この演出では彼女に面と向かって言う。何か変な感じだ。

5幕2場、下手でCressidaとDiomedes (如何にも敵役っぽいRichard Dillane) がいちゃつくのを上手でTroilusとUlyssesが目撃するのだが、それらを舞台手前の穴から顔を出したThersitesが批評する。最後、貧弱な下着一丁という衰えた姿で這いずりながら現れたPandarusは、台詞を終えた後、その穴に落ちるようにして退場するという趣向だ。

この頃のRSCの大劇場での出し物にありがちだったことだが、この公演でも舞台装置がとにかく大仰で、それが演出にどう活かされるというわけでもなく、どちらかと言えば退屈な舞台だった。舞台装置を除けば、上にも書いた通り、印象に残ったのは異様なほどの裸体オンパレードだけである。

### *Twelfth Night* (『十二夜』) 1

1996年4月10日昼所見。RSC. Royal Shakespeare Theatre (Stratford-upon-Avon).

Proscenium archの端から端へと渡した橋状のものを必要に応じて上下させるのは4年前に*The Merry Wives of Windsor*の折にも見たから、これは常設の機構なのだろう。幕開き、この橋の上に楽師らを配した。稲光がし、照明を落とした

---

<sup>5</sup> 英文の引用には、W. J. Craig ed., *The Complete Works of William Shakespeare* (Oxford U.P., 1914) のWeb版を使う。

舞台奥の青い布が嵐に翻弄される波のように翻る。一瞬その布が吹き上げられ、その下からViolaを抱えた船長が飛び出してきて2場。その後、同様にSebastianを抱えたAntonioが飛び出してくるという、戯曲にはない默劇を加えている。雨(舞台面に当たってさらさらと音をさせながら飛び散る、何か樹脂系の粒)が降る中、黒い服を纏ったOliviaと思しき一行が墓参りをするという場面も加えられていた。

舞台セットは、上記の上下する橋状のものや舞台奥を左右にスライドする部分等を使って、場面ごとに変わっていく。かなり視覚重視と言うべきか、Tudor朝様式の家並みの小さな模型を奥に配したり、葉の茂った木の枝を上から降ろしてアクセントにしたりするなど、今回の作品と同じくIan Judgeが演出した*Love's Labour's Lost* (前年、旅公演で東京に来た時、観にいった)の舞台セットの雰囲気と似たような感じを受ける。後者は1910年代の設定とのことだったけれど。

Sir Andrewが自分はbeefeaterだから頭が悪いのかも知れないと漏らす場面では、この当時話題だったMad Cow Diseaseが想起されてか、客席の笑いを誘う。Malvolio役のEdward Petherbridgeは、手紙を拾う前にたっぷりと時間を取って滑稽な所作を見せる。その熟練の技に観客も腹の皮を振った。

最終場面、双子が再会して一同驚愕する場面では、役者全員で舞台上をぐるりと回るなど、ドラマティックに盛り上げようとしたのだろうが、如何にもわざとらしい。

最後、二組のカップルやずっと放っておかれたAntonioが退場すると、俄に雨。ちゃんと見えなかったが、Sir AndrewかMalvolioか、帽子を被ってとほとほと舞台後方を横切って退場する。Antonioがコートの襟を立てながら急ぎ足でその後を行くと、Mariaが上手の扉から頭陀袋を外に放り出し、Festeが追い出されて舞台中央へ。そしてエピローグ代わりの例の歌という段取りだ。

読んでもらったの通り、開幕時の海の波に見立てた青い布に始まり、最後のOlivia邸からの何人かの退去に至るまで、ところどころ、戯曲には無い默劇を加えているのが特徴的と言える。視覚重視、とにかく見てわかりやすくというのが、Ian Judgeのモットーなのかもしれない。

そう言えば、これの何年も前に、双子を同じ役者に演じさせた演出(一人二役)でも話題になった *The Comedy of Errors* の舞台があったが、その演出家も彼ではなかったか。観客の想像力を信じて喜劇の根本を壊してしまうような愚<sup>6</sup>は勘弁願いたい、今回の *Twelfth Night* でやった程度なら、面白いと言えるだろう。

### *Twelfth Night* (『十二夜』) 2

1996年8月18日夕所見。劇団 Pentacle Theatre. Grassy Knoll (London, Southwark).

Grassy Knollについては既に述べた。<sup>7</sup> 昼過ぎから同所で Legend Theatre Company による *Adventures of Theseus* を観て、少し間を空けて夕方から連チャンで観劇。(何しろ野外なので) 西日を避けて客席入口近くの塀際に席を取る。舞台の向こう側の下で、二人の若い女性が lute を演奏している。正方形の舞台の各辺には、椅子やベンチが一つずつ。片隅に植木が二鉢。

16:15に開演。衣裳は、古典的と言うかエリザベス朝風のそれ。1幕1場で Curio が塀向こうから声のみ、Captain と Antonio が一人二役、Valentine と Officer が一人二役、Priest は無しということの他は、小さな劇団にしては役者もふんだんに使い、結構金を掛けた舞台と見た。

Viola 役の女優はきりっとした顔立ちで、Sebastian 役の男優とも雰囲気似ていなくもない。Toby はまだ若そうだが、腹の出た俳優。Maria も若い。Toby と Maria は中年以上の役者が演じることが少なくないが、これくらいまだ色気のある方が本当だろう。Andrew は薄い髪を真中で分け、如何にも田舎臭い。Feste は道化帽も被らず道化服も着ず、顎髯を生やし頭を刈り上げて、ごろつきみたい

---

<sup>6</sup> Ian Judge 演出の *The Comedy of Errors* は直接扱っていないが、この作品に限らず、Shakespeare 喜劇の双子をどう扱うべきか、双子を一人二役で演じさせることで何が損なわれてしまうかについては、拙論「舞台の上の双子たち：『間違いの喜劇』の上演を巡る考察」を参照されたい。

<sup>7</sup> 拙論「Shakespeare 劇の演出について(2)」p.65 参照。

な感じ。この作品では当然随所で歌を歌うが、下手ではないものの、それほど上手いというわけでもない。Oliviaは黒い髪、太い眉、鋭い目、大きな口で、Timothy Daltonにも似た、濃い顔立ちをしている。Malvolioは如何にも自惚れの強そうな感じだが、灰色の髪をしているものの、まだ若そうな役者だ。この役はもう少し老けてからの方がいいかもしれない。

2幕5場では、Toby, Andrew, Fabianの三人は身を隠すための木の枝を持ち、舞台下をあちらこちらへと歩き回っては傍白する。

Malvolioが暗室に監禁されているはずの4幕2場を、こういう円形劇場の裸舞台でどう演じるのかと思ったが、Malvolioは目隠しをされ手を縛られて舞台上に引き出される。

上でも述べたように、こんな小劇団にしては役者の数にせよ衣裳にせよ金が掛かっている感じがしたが、演技や演出については可もなく不可もなし。いや、そういう言い方をしては身も蓋もないけれど、無難でスタンダードな舞台だった。

### *The Two Gentlemen of Verona* (『ヴェローナの二紳士』)

1996年8月22日昼所見。Shakespeare's Globe (London, Southwark)。

劇場について一言しておきたい。Shakespeare時代のGlobe座を模して、元の場所から数百メートルと離れぬThames川河畔に復元された劇場である。一般的には1997年に*Henry V*をもってオープンしたと信じられているのだろうけれども、実はその前年の1996年、pre-opening seasonと称してここで公演があったのだった。私が「Shakespeare劇の演出について(2)」の67ページに項目だけ挙げた*A Midsummer Night's Dream*もその時の公演のうちの一つだし、今からここに書こうとしている*The Two Gentlemen of Verona*もそうである。だから、この年にイギリスにいた私は、少し大袈裟な言い方を許してもらえれば、世界中で最も早く、復元されたGlobe座で芝居を観た人間の一人であった。

そんなわけで、Shakespeare劇の演出について記録しようとする拙論の趣旨からは少し離れるが、開演直前の劇場内外の様子を少々ここに書き付けることも、演劇史の資料として何かしら資するところがあるかもしれない。

この日、短期訪英中の知人、大阪の大学でドイツ語を教えるY氏を案内してGlobe座に向かったのだったが、開演時刻までまだ少し時間があるというのに、河岸には既にすごい人だかり。Y氏は二日前に電話予約した券をBox Officeで受け取り、Yard(立ち見の平土間)の入口に、私はかなり前に予約してあったReserved Seatingの券を持っているのでGalleryの入口に向かう。やがて開場。

Sam Wanamakerの構想から何十年も掛かったShakespeare所縁の劇場の、仮とは言え待ちに待ったopening seasonとあって、思ったとおり、カメラで場内を写している人が結構いる。茅葺き屋根の一部に青いビニールシートが掛けられている。舞台の上の破風部分も、取り敢えず板を張りましたというような感じだ。棧敷席の手摺の下、縦棧が入るはずの部分も、ところどころ金網のようなものを張って間に合わせている。いずれも、まだ工事が完了していないためだ。

最初、Yardの観客は座ったり寝そべったりしていたが、思いのほか舞台が高く(成人男性が立って首が出るか出ないかくらい)、奥行きもあって、見えにくいと判断したのか、じきに皆立ち始めた。Box Officeの入口には本日売切の貼紙がしてあったので、Yardなどぎゅうぎゅう詰めかと思っていたが、結構空いている。昔と違い、消防法か何かで、ある面積の劇場に入れる人数は何人までと決められているからだろう。

14:30, *The Two Gentlemen of Verona*開演。カップが運ばれてきたテーブルで、現代服のValentine(アフリカ系のLennie James)とProteus(artistic directorも務めるMark Rylance)が話をしている。どこかのカフェといったところ。Rylanceはやや薄い頭髪に下がり気味の眉、時折おろおろした物腰なども見せ、悪い奴なんだけれどもどこか憎めないという感じをよく出している。逆に、こうでないと、最後のValentineによる許しが観客にとって受け入れ難いものになるだろうから、その点、この配役と演技は正解と言えるだろう。

サングラスにバックバックという出で立ちの若者が、下手のドアからふらっと入ってきて、上手のドアに消えた。まさかとは思うが、間違っって舞台上がってしまったお客さんかと一瞬勘違いしかねないほどだ。上手のドアから戻ってきて、もう一つのテーブルに座る。これがSpeed(Ben Walden)だ。カフェで自分



が飲み食いした分の支払いをちゃっかり Proteus に押し付けて退場する。

Antonio は、この役と Thurio 役を演じるはずだった George Innes が脚を骨折して出演不能になったため、Duke 役の Matthew Scurfield が兼ねる。突然のことでまだ台詞が入っていないのだろう、手に台本を持ちながら、不測の事態とは言いながら、これはやはり少しだけない。ふつうは、どんな役にも understudy を置いておくはずだ。本来の Duke 役の時は、特に3幕1場など、威厳と共に、この公爵の嫌らしさを適度に醸し出し、良かったのだが。

Julia 役 Stephanie Roth は濃い茶色のストレートの髪を背中まで伸ばしている。一方、Silvia 役 Anastasia Hille は金髪で、アップ。Julia がズボンとチョッキで男装し、長い髪を野球帽の下に上手く隠すと、Silvia は結び上げていた髪を下ろして登場——と、視覚的にも対照の妙を醸した。二人とも長身で舞台映えがする上、演技力も確かだ。二人が直接声を交わす4幕4場など、思わずほろりとする。

Launce 役の Jim Bywater も好演。2幕3場など、下手な役者がやるとこれほどわざとらしくつまらぬ場面はないが、結構笑いを取っていた。犬は本物。よく訓練されていて大人しい。Launce に怒鳴られてもこの犬が飄々としているので、一層笑いを誘う。この犬が吠えたのは、2幕5場で、五色の紙テープのようなものをひらひら下げた中央開口部の向こうに、(私の座席からははっきり見えなかったのだが、たぶん) 手足を縛られて床に転がる男を見た時のみ。その傍らには赤い皮のミニスカートを穿いた如何にも娼婦といった感じの娘 (Rebecca Lenkiewicz か) が立っていたから、売春宿や SM クラブのある盛り場というつもりなのだろう。

Thurio は元々 Host を演じるはずだったらしい Steven Alvey。髪にパーマを当てた中年太りのおじさんという体で、4幕2場ではアロハみたいな派手なシャツ姿。楽士の生演奏をバックに Thurio 本人が歌を歌う。これがまた調子っ外れ。Silvia が二階から靴を投げ、次に枕を Thurio の頭にぶつけ、とうとう最後には水を掛ける。そこで、ギター伴奏をしていた Proteus が途中から代わって歌うと、これが結構上手いという趣向だ。

それにしても (この芝居に限らずだが) イギリスの観客の反応は日本のそれと



違って随分激しい。笑うところではもちろんよく笑うし、この作品では特に Proteusが友人や恋人を裏切る箇所ですーとかシューツ (hiss) とか非難の嵐だ。

一緒に観劇したY氏が後で語っていたことだが、ドイツでも観客がこんなに反応することはあまりないとのこと。歌舞伎の掛け声ではないけれど、こうやって声を出すことで舞台に「参加」し、そのことによって更に芝居を楽しもうということなのだろう。加えて、半野外で舞台を囲むというGlobe座の特殊な構造が、観客の開放感を高めるのに一役買っているのは間違いない。しかも、待ちに待った pre-opening season という特別感が、観客の気持ちを一層高揚させているのかもしれない。

さて、最後の大詰め。裏切った友人をたちまち許すばかりか、自分の恋人を譲ると言っているようにも聞こえかねないので、不自然極まりないとして古来議論の尽きない “All that was mine in Silvia I give thee” (V. iv.) のくだり。日本語訳ならどう解釈したのかわかる<sup>8</sup> ところだが、もちろん原文のままなので、どういうつもりで Valentine が言ったのかはわからない。すっと耳を抜けてしまった。Silvia は別に驚いた様子も見せないし、その後も Valentine と睦んでいるから、Silvia を Proteus に譲るという意味にはあらずというつもりなのだろう。

Proteus が Sebastian の正体に気づき、心変わりを恥じた後、Valentine が二人の手を結ばせようとするが、Julia はなかなか手を出したまらない。ようやく手を繋ぎ、Proteus が Julia を抱き締めて “Bear witness, heaven, I have my wish, for ever” と誓っても、Julia はおごなりに抱かれたままで、やや間を置いてから漸く “And I mine” と呟くのみ。山賊に捕まって引き立てられてきた公爵も、娘を Valentine に嫁がせようという台詞は淡々としたもの。状況を考えて、心ならずもということだろう。その後、Valentine が、この山賊たちの追放処分を赦免し

---

<sup>8</sup> 古い例から挙げれば、坪内逍遙は「シルギヤに於ける愛の一切を君に譲るよ」、北川悌二は「シルヴィアにたいするほくの権利は、すべてそれをきみにゆずることにしよう」、小田島雄志は「シルヴィアにおける愛のすべてをきみにも与えよう」。上野美子ほか編、『シェイクスピア大全』CD-ROM版より。

てやってほしいと公爵に請う。皆ホラー映画に出てきそうな奇怪な面を被ったり makeup をしたりし、ある者は手が無くて杖代わりの棒が袖から出ており、ある者は脚が利かぬと見えて車の付いた板に乗ったりしているのだが、Valentineがこの者たちは“*endu'd with worthy qualities*”だと言うと、俄にそわそわして澄ましてみせたりするのが面白い。最後、Valentineや公爵らが退場した後も、自らを恥じてかぐずかぐずする Proteus に、Julia がやれやれという感じで優しく手を差し伸べ、二人で退場。総じて、最後の場面については、その良し悪しは別として、reality を重んじる方向で演出した (Jack Shepherd) というところだろう。

むすびにかえて

紀要編集委員の先生にわがまを言って、かなり以前に観た舞台の記録を掲載させてもらい、こうして日の目を見せてやることができた。改めてここで感謝申し上げたい。

こんな断片的な、とりとめのないメモ書き程度のものが一体何の役に立つのか、学術的にであれ今後の演出のためにであれどんな価値があるのかと訝しく思う向きもあることだろう。この研究ノートを結ぶに当たり、たとえ断片的であれ、Shakespeare の舞台の細部々々に目を向けることの重要性について、改めて記しておきたい。

あれはまだ私が学部生の頃だったと思う。*Macbeth* 2幕2場の終わり掛け、Duncan 暗殺直後、罪の意識ですっかり怖気づいてしまった夫に代わり、凶器を Duncan の寝室に置きに行って戻った Lady Macbeth が言う台詞：“My hands are of your colour, but I shame / To wear a heart so white.” 私はこれを読んで、夫人は毅然とした態度で、気弱な夫を叱咤せんと昂然と言い放つのだと思った。と思ったというより、字面で読む限り、それ以外の可能性など夢にも思わなかった。が、それからほどなくして、舞台上の Lady Macbeth がこの台詞を、夫をとより自分自身を無理矢理叱咤するかのようにおろおろしながら語るのを観た。後に夫人が罪の意識に苛まれた挙句、夢遊病になってしまうことへの伏線である。

誰が演じていたのか、今となっては記憶が定かでないのだが、まだ若かった私には、この演出は衝撃的だった。台詞は一言一句変わっていない。それでも、台詞の言い方一つによってこんなにも夫人の印象が変わり、夫婦の関係性が変わり、そして劇全体が変わってしまうのだ。いや、それ以前に、一つの台詞に、それを単純に文字通り受け取るばかりでなく、こうも異なった別の解釈を載せることが許されているのだということ自体に、Shakespeare劇をまだ見慣れていなかった私は衝撃を受けた。

言い古された例だと思うが、*The Tempest* の4幕1場、ArielがProsperoに向かって唐突な問い掛けをする：

Ari. Do you love me, master? no?

Pro. Dearly my delicate Ariel.

問いの直後、間髪を入れずProsperoがArielの目をじっと見つめるなりして真摯に答えるのであればいいが、間は置かずともよそを向いたまうるさそうに答えたり、一瞬の間を置いて目を泳がせながら答えたりするようであれば、台詞の文字面では「愛している」と言いながら、実のところ愛してはいないのだなということになる。言い方一つで台詞とは正反対のことを伝えることも可能なのだ。こうした演出を随所で挟んでいけば、ProsperoとArielの関係性はもちろんのこと、Prosperoという人間のとなり、ひいては作品全体の趣が随分と違ったものになっていくであろうことは想像に難くない。

だからこそ、一見些細な細部が大事なのだ。一つの台詞の微妙な言い回し、ちょっとした所作や表情、小道具や衣裳、大道具、照明に音楽、ト書きがほとんどないShakespeare劇だからこそ、演出が変わる度、劇団が変わる度、新しい発見があるというのはこのためである。この研究ノートで取り上げた作品のうちの一つでも劇場で観たことのある人であれば、自分が観た舞台との細部々々における違いを通して、また新たな作品解釈の可能性を見出してくださることと思う。Shakespeare劇を一つでも演出したことのある人ならば尚更と思っている。

## 文献目録

今回も拙稿の性質からして、依拠しているものと言ってもせいぜい当時の公演プログラムの配役一覧のページ程度なので、煩を避けるため、それらは割愛した。

Craig, W. J. ed. *The Complete Works of William Shakespeare*. Oxford U.P., 1914. Converted to digital data in Bartleby.com. <<https://www.bartleby.com/70/>>

“The History of the Inn.” The Honorable Society of Lincoln’s Inn. <<https://www.lincolnsinn.org.uk/about-us/the-history-of-the-inn/>>

上野美子, 松岡和子, 加藤行夫, 井出新編. 『シェイクスピア大全』CD-ROM版. 新潮社, 2003.

鈴木邦彦. 「舞台の上の双子たち : 『間違いの喜劇』の上演を巡る考察」. 『論攷 英米文学研究』XXIII号. 関西学院大学, 1995. 1-17.

\_\_\_\_\_. 「Sではじまる劇場」. 「イギリス劇場案内」. 仁川演劇研究所のウェブサイト, 1997. <<http://engeki.art.coocan.jp/BTS.htm>>.

\_\_\_\_\_. 「シェイクスピア, 演出, そして劇場 : 両義的認識と動的想像力」. 『商学論究』第44巻第4号. 関西学院大学商学研究会, 1997. 103-125.

\_\_\_\_\_. 「Shakespeare劇の演出について(1) : From A to J (From *Antony and Cleopatra* to *Julius Caesar*)」. 『英語英文学研究』第86号(第44巻第2号). 創価大学英文学会, 2020. 15-35.

\_\_\_\_\_. 「Shakespeare劇の演出について(2) : From K to M (From *King Lear* to *A Midsummer Night’s Dream*)」. 『英語英文学研究』第87号(第45巻第1号). 創価大学英文学会, 2020. 59-76.

高橋康也, 喜志哲雄, 大場建治, 村上淑郎編. 『研究社シェイクスピア辞典』EPWING版CD-ROM. 研究社, 2000.